

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第181回哲学カフェ例会(2023.7.15)

哲学カフェ15周年記念講演討論会 2023.7.15 長良川スポーツプラザ

テーマ 《ロシアとウクライナ戦争～日本はどう向き合えばいいのか》



<挨拶> 吉田千秋(主宰・コーディネーター)

岐阜大学を定年退職した年に、この哲学カフェを始め、コロナ問題で3カ月ほど開催できなかった時期もありましたが、多くの人の協力を得て15年続けることができました。

今、私たちは歴史の大きな転換期にいます。昨年2月に始まったウクライナに対するロシアによる戦争が国際環境を一変させました。この戦争が国際法に反したロシアの暴挙であり、全く正当化されないものであることは明らかです。それに対してロシアへの非難や制裁が行われてきましたが、戦争はすぐに終わるといった見込みは外れ、長期戦の様相を呈しています。どうやってこの戦争を早く終わらせるかを考える必要があります。しかしメディアは戦況報道ばかりで、根本的な問題はほとんど論ぜられていません。戦争をゲームの様に捉えるのではなく、戦争の背景を理解することが重要でしょう。

この戦争が始まるまで、日本の人たちにとっては、ウクライナはそれほどなじみのある国ではなく、政治や歴史、文化についてあまり知られてはいないよう

でした。一方、ロシアに関しては少し状況が違って、ロシアの文学や音楽や映画などで親近感を持っている人は少なくないでしょう。ボクもロシアには90年代に世界哲学学会がモスクワで開催され、訪れる機会がありました。

今日、講師として来て頂いた竹森さんは、ロシア・東欧の比較憲法の研究に携わってきた法学者で、ウクライナにも精通されています。そうした専門家の視点から、ロシア侵略の背景、今後の展望についてお話しして頂きます。



<講演> 竹森正孝氏(岐阜大学名誉教授)

この戦争を果たして当事者双方が受け入れることのできる形で解決することができるのでしょうか。少なくともこれまで解決策の名に値する提案を示した者は誰もいません。戦争は前線で塹壕戦の様相を呈していて、一進一退の状況にあります。

ロシアとウクライナはベラルーシと共に兄弟国などと言われますが、外国人の目にも明らかな違いもあります。今日ウクライナ風に呼ぶ様になった首都キーウを歩いていると、ヨーロッパの街並みと同じ様に、あちこちに喫茶店を見かけます。ところがモスクワを歩いていると、喫茶店はほとんど目にしません。これはウクライナの西半分がポーランドなどヨーロッパの国々とのつながりが強い地域だったことと深い関わりがあります。喫茶店文化がヨーロッパから少し離れたロシアに定着することはありませんでした。

ロシアが特別軍事作戦と称する戦争は、多くの人の持つ印象とは違って、決して突然始まったものではありませんでした。プーチン氏は東方拡大に拡大するNATOに警戒心を強めていました。とりわけ旧ソヴィエト諸国がNATOまたはEUに接近することは絶対に容認し難いことでした。

今も続くこの戦争の直接、間接の影響は甚大です。ウクライナの人たちの命が奪われ、その生活基盤が破壊されているだけではありません。ロシア社会も深刻な影響を受けています。若者を中心に、戦争を嫌い、またはプーチン支配のロシアに見切りを付け国外に逃れる人たちが続出しています(出国者150万人以上とも言われる)。プーチン大統領は言論統制、反対意見の封じ込めなど締め付けを強化していますが、内部矛盾は深刻の度合いを強めています。

プーチン氏は“兄弟国”の統合を目指す大ロシア主義を掲げ、ロシアの隣接する旧ソヴィエト共和国がEUやNATOに接近することは大ロシアの復権の妨げと見なされます。その考えから、2008年にグルジア(現ジョージア)に軍事侵攻し、ジョージアの領土内の一部を事実上支配下においています。またモルドバの「沿ドニエストル」も実効支配しています。

ウクライナでは、2014年、マイダン革命で親ロシア派大統領が追放された後、クリミア半島及びドンバス地域(ドネツクとルガンスクの2州)の分離独立運

動が起こります。クリミアは2014年3月に疑問の多い住民投票の結果独立を宣言し、まもなくロシアに併合されました。ドンバス地域では分離派の支配地域がドネツク人民共和国とルガンスク人民共和国として独立を宣言し、2022年10月、ロシア連邦への加盟が公式に認められました。

ロシアとウクライナの関係を理解するためにその歴史を概観してみましょう。9世紀の半ばから13世紀半ばモンゴル人の侵攻まで、キエフ・ルーシという国がありました。プーチン氏はこのキエフ・ルーシを引き合いに出して、ロシア、ベラルーシ、ウクライナは皆同じルーシの仲間であることを強調しています。モンゴルの影響が強かった東部のルーシでは、13世紀の後半にモスクワ大公国が生まれ、これが17世紀ピョートル1世の時代にロシア帝国に発展します。モンゴルの影響の弱かった西部ルーシ(ウクライナ、ベラルーシ)はモンゴル支配の後リトアニア大公国の支配下に入りました。その後、リトアニアが弱体化し、この地域ではポーランドの影響が強まります(カトリック化)。ポーランドがプロイセン、オーストリア及びロシアによって18世紀の終わりに分割され、リトアニア、ベラルーシ、ドニエプル川右岸はロシア帝国に編入されます。19世紀後半ロシア帝国が弱体化しウクライナでナショナリズムの機運が高まります。これに対してウクライナの独立性を否定するプーチン氏は、ウクライナがロシア革命の際、民族自決を唱えたレーニンによって誤って人工的に作られた国に過ぎないと、レーニン批判を展開しています。

言語においてキルル文字を使用することでも明らかな様に、ロシア、ウクライナ、ベラルーシは東スラブ





系に分類される近い関係にあります。同三ヶ国はまた宗教においても共に、西方のカトリック及びそれから分離したプロテスタントと並ぶキリスト教の一派である正教会(ギリシャ正教または東方正教会)に属しています。1054年にカトリックと別れた正教会は、ビザンツ帝国の衰退と共に、国家単位、民族単位で独立していて、それぞれが国家権力と密接な関係を持つ傾向が際立っています。

東スラブ系の3カ国が密接な関係にあることは明らかです。しかしその何れも同質的な一つの塊と言う訳ではありません。ウクライナに関して言えば、ドニエプル川を挟んで東西で文化が少し違っています。東側はロシア語を話すウクライナ人が沢山います。西側はポーランドやリトアニアの影響が残っています。また黒海を挟んで対峙するトルコの影響も無視できません。ロシアはリトアニアなどバルト3国を支配してバルト海に勢力を広げることになりますが、元々海の遠い陸の国で、海のある国との友好関係を求めていました。

ウクライナの独立の歴史、特に2014年以降の対立の歴史を少し見てみましょう。2014年、マイダン革命の後、分離独立派がウクライナの政府の意向を無視して住民投票を強行し、賛成多数でロシア編入の申請が支持される結果となりました。ロシアはこの申請を受理して、クリミアがロシアの領土であることを宣言しましたが、それを認めている国はCISに属する国々を含めほとんどありません。東部ドンバス地域で政権派と分離派の武力衝突が激しさを増す中、独仏が間に入って仲介、現状維持を前提に停戦し協議することを内容としたミンスク合意を成立させましたが、双方が不満を持っていて、合意がしっかり履行されることはありませんでした。激しく反発するウクライナはナショナリズムの傾向を強めると同時に、親欧傾向を一層際立たせ、EU及びNATO加盟を目指すことを政治目的に掲げました。

ウクライナ戦争を正しく理解するために、プーチン氏の政治を知る必要があります。プーチン氏は旧ソ連の諜報機関KGBの出身で、様々の情報に通じてうまく立ち回り、権力の階段を上りつめて行きました。ボリス・エリツィン大統領の下で首相代理から始まり、次に首相を務め、後継の大統領になりました。首相時代、チェチェン紛争を徹底弾圧で終息させ、国民の人気を得て、エリツィン氏の後継に指名されました。エネルギー産業を国家管理の下に置いて、混乱した経済を安定させ、国民の圧倒的な支持を背景に権力基盤を固めることに成功しました。対外関係において、2000年代当初、欧米と協調する姿勢を見せていましたが、経済の安定化に成功した後、次第に独裁色を強めていきました。もっとも彼の考え方は元々強権的だったという見方もあります。情報統制を強め、メディアを政府のコントロールの元に置いて、政権批判を認めない姿勢を鮮明にしています。プーチン批判の急先鋒でノーベル平和賞を受賞した新聞ノバヤ・ガゼータの記者アナ・ポリトコフスカは、幾つかの暗殺未遂事件の後、自宅前で殺害されました。ウクライナ戦争が始まって後、独立した報道機関は完全に活動を停止し、ロシアから政権批判の報道は全く存在しなくなりました。

私たちは戦争に発展したロシアとウクライナの紛争を可能な限り平和的に解決する方法を考える必要があります。問題解決のあり方を考えるために第二次世界大戦後のヨーロッパにおける安全保障体制構築の歴史を簡単に振り返ってみましょう。

戦後、米ソの対立が顕在化する中、北大西洋条約機構(NATO)及びワルシャワ条約機構という二つの集団安全保障体制の枠組みが作られました。この枠組みが政治的・世界的に対立する二つの陣営による



長良川鶺鴒

Photo by Kuwabara



冷戦体制の構図を表していました。社会主義政権の崩壊で、ワルシャワ条約機構は解体しましたが、旧ソヴィエト共和国はロシア主導で新たな枠組み独立国家共同体CISが生まれました。しかしこれは、

既にジョージアは脱退、ウクライナも事実上脱退状態にあり、ほとんど機能していません。今後もCISがNATOに対抗する様な軍事同盟に発展することはないと思われます。

二つの陣営に属する国々は対立し合っただけではありません。緊張を和らげ、悲惨な結果を招くことになる戦争を回避する努力も行われてきました。スイス、スウェーデン、フィンランドの様な中立国を含め、NATO諸国及びワルシャワ条約機構に属する全ての国が参加して、1972年全欧州安保協力会議が設けられ、1976年ヘルシンキ宣言が採択され、主権の尊重、武力不行使、領土の不可侵、人権尊重等、平和共存のために欠かせない重要事項の確認がなされました。これが新たに旧ソヴィエト共和国(中央アジア諸国を含む)を加え全欧州安全保障協力機構に発展して、現在も活動を続けています。但しこの高い理念を掲げた枠組みが十分な成果をもたらすまでに至っていないことも事実です。

対ロシアで団結を示している欧米の先進国は、近年経済力を増しグローバルサウスと呼ばれ注目を集めている発展途上国から、ダブルスタンダードで行動していると批判をされています。欧米諸国は、しばしば、民族的少数派を不当な弾圧から守るといった人道的危機の回避を理由に挙げ、地域紛争に軍事介入することを正当化してきました。しかし欧米の掲げる



正義は、恣意的で、ご都合主義の疑いを拭えない印象を与えるものでした。ユーゴ紛争やコソボ紛争、

コソボ独立の問題が生じた際、欧米各国は、多数派であるセルビアの立場に冷淡で、性急に民族グループの分離独立を認めてしまう対応をしました。領土保全とか、主権の尊重に関わる国際法の順守といった問題において、ダブルスタンダードを疑われない様に、首尾一貫した対応をするように努めることが重要です。

最後に、ロシアの国内政治、ロシア的立憲主義ないし民主主義について触れて置きます。憲法改正をロシアでは議会だけで行うことができます。2020年に改正が実施され、大統領の任期は最大2期12年と定められました。この憲法改正の際、あえて法的に定められていない国民投票が行われました。新たに定められた任期に関する2期12年の規定は、既に大統領職にあって2024年まで任期を務める現職のプーチン氏には、彼が次の大統領選に立候補した場合に、新たに適応されることになっていて、その場合、プーチン氏は再び2期12年、2032年まで大統領職に留まることができます。ロシアには、憲法(法律)が国家権力を制限し、国民を権力から守るという考えは存在していません。あくまで大統領が個人の人権保障の責任を負うと理解されています。ロシアの新しい憲法は正教会の保守的な世界観を色濃く反映していて、同性愛などの性的マイノリティは好ましくない存在と捉えられ、その権利は認められていません。法律認識、憲法観は日本や欧米と大きく異なっていて、3権分立の考えが乏しく、大統領令がそのまま法律と認められます。



言論統制が厳しく、表現の自由は著しく制限されているので、簡単に国民の本音を知ることはできません。プーチン氏の戦争に対する支持は、実際のところ見かけほど大きくありません。特に若い世代は、戦場に駆り出される不安もあって、かなり批判的な意見を持っていると思われます。ウクライナ戦争の行方、特に停戦の可能性は、沈黙せるロシア国民に懸っていると云えるかもしれません。この戦争をできるか

最後に、ロシアの国内政治、ロシア的立憲主義ないし民主主義について触れて置きます。憲法改正をロシアでは議会だけで行うことができます。2020年に改正が実施され、大統領の任期は最大2期12年と定められました。この憲法改正の際、あえて法的に定められていない国民投票が行われました。新たに定められた任期に関する2期12年の規定は、既に大統領職にあって2024年まで任期を務める現職のプーチン氏には、彼が次の大統領選に立候補した場合に、新たに適応されることになっていて、その場合、プーチン氏は再び2期12年、2032年まで大統領職に留まることができます。ロシアには、憲法(法律)が国家権力を制限し、国民を権力から守るという考えは存在していません。あくまで大統領が個人の人権保障の責任を負うと理解されています。ロシアの新しい憲法は正教会の保守的な世界観を色濃く反映していて、同性愛などの性的マイノリティは好ましくない存在と捉えられ、その権利は認められていません。法律認識、憲法観は日本や欧米と大きく異なっていて、3権分立の考えが乏しく、大統領令がそのまま法律と認められます。

言論統制が厳しく、表現の自由は著しく制限されているので、簡単に国民の本音を知ることはできません。プーチン氏の戦争に対する支持は、実際のところ見かけほど大きくありません。特に若い世代は、戦場に駆り出される不安もあって、かなり批判的な意見を持っていると思われます。ウクライナ戦争の行方、特に停戦の可能性は、沈黙せるロシア国民に懸っていると云えるかもしれません。この戦争をできるか

ざり破壊や殺戮を伴わない形で終わらせる必要があります。国際法に反した行為は絶対に認めないようにするために、強い決意と国際的連帯が欠かせません。かつてペレストロイカは、西側から歓迎されましたが、改革に伴う困難を克服するために必要だった

具体的な経済財政的支援は十分行われませんでした。それがあつたなら、今とは違うロシアが生まれていたかもしれません。そのことが未だに残念に思われます。

《討論：質疑応答》

<意見・質問>

*ロシアやウクライナは社会に深く根差した腐敗という問題を抱えている。社会の末端にまで蔓延する汚職は社会主義時代からの負の遺産である。ペレストロイカに期待したが、残っている様に思う。

*それぞれの国の成立事情など複雑な歴史的背景を知ることができた。ウクライナのことをほとんど知らず、ロシアがレーニンの作った社会主義国ソ連の後継国という認識しか持っていなかった。チェルノブイリ原発がウクライナにあることを知ったのもこの戦争が始まった後のことだった。

*この戦争は日中戦争と類似点があり比較可能に思われる。日本は国際連盟の常任理事国だったが、中国の領土や主権を露骨に侵害する戦争を始めた。今後の見通しをもう少し具体的に聞きたい。



<竹森> *確かにロシアやウクライナを始め旧ソ連圏諸国の政治腐敗は際立っている。マイダンの様なウクライナにおける政変も、政権の腐敗に対する反発から起きたと言って過言ではない。腐敗の克服は容易ではないが、ウクライナは戦時下で大統領の権限

が強化されていて、指導力を発揮して国家機関の浄化を推し進めるチャンスである。国際社会と連携を図ることで、官僚組織を引き締めることもできる。

*ロシア革命の評価は揺らいでいる。世界の歴史の流れにおいてロシア革命をどのように評価するのかという問題で、歴史学界の中で昔から色々な議論があるが、レーニン率いるボルシェビキの10月革命よりも2月革命の方が重要だったのではないかという意見もある。何れにせよ、10月革命による社会主義政権の誕生は、世界中の農民や労働者の連帯を促し組合運動を触発するという大きな役割を果たした。

*日本を含む欧米諸国と中露が対立を深める中、今後の世界の平和と発展に中南米諸国がもっと大きな役割を果たすことに期待している。

<意見・質問>

*ここにいる大半の人と意見を異にしている。大多数が「ロシアはけしからん」を前提に議論する。自分はこれに疑問を感じる。オレンジ革命も、マイダン革命もアメリカによって秘かに仕組まれたものである。西側メディアは偏っている。欧米メディアはウクライナで親口派が弾圧されていることを報道しない。ロシアの軍事行動は正当防衛である。ロシアの攻撃目標は軍事目標に限られていた。

*ソ連崩壊後の経済の混乱が今日まで悪く影響している。EUからの経済援助も期待に反して十分でなかった。アメリカの動きが怪しく気がかりである。

<竹森> *先ずはつきり言わなければならないこと





は、ロシアの軍事行動は他国の主権を侵す侵略であり、全く容認されないということ。ウクライナで政権派と親口派の対立、衝突があったことは事実だが、飽く迄、ウクライナ内部の問題で、ロシアがウクライナに大規模な軍事侵攻を行うことを少しも正当化しない。

*コソボ紛争におけるNATOの軍事介入には確かに問題があった。コソボのアルバニア系住民とセルビア系住民の対立は両者に問題があった。しかしNATOは一方向的にアルバニア系の側に立つ偏った対応をしてしまった。

<意見>

*ロシアの侵略を直視しないで、ウクライナ問題を論じることは誤りである。ウクライナ側にとって、戦うことは主権を守る正当な行為に過ぎない。

*2001年ロシアがNATO加盟を求める動きがあった。米国政府は認めなかったらしい。もしロシアがNATOに入っていたらどうなっていたらと考えてしまう。

<竹森> *クリミアの併合も、ドンバス地域の東部2州の併合も、国際ルールに定められた条件が満たされておらず、国際法的に認められない。ロシアは始めからそれを意図して行動していない。

*9・11の後、ロシアはNATOの対テロ戦争を支持していた。その頃、ロシアは明らかにNATOに協力する姿勢を示していた。

<意見>

*歴史的経緯は当事者には二次的な問題に過ぎない。殺し合わない世界を作る様にしないと人類の明るい未来は開けない。日本はアメリカに追随し過ぎである。もう少し距離を置いた方が好い。どうしたら命を大切に政治が出来るかについて学者たちにもっと知恵を絞って欲しい。

《講演・討論会を終えるにあたって》

<竹森正孝> : 私たちは直ぐに結果を出すことを求められる時代に生きています。話し合いで自分の期待する結論が出ないと我慢が出来ない傾向が強まっています。戦争をするのは、自分に従わない者を力で屈服させ、早く自分の思い通りにしたいからです。意見が対立しても、力(武器)を使わないで、共通の場を設けて一緒に時間を掛けて話し合う、兎に角合意ができるまで時間を掛けて話し合う、そういう努力をすることが必要です。



<吉田千秋> : 色々な意見表明ありがとうございました。ボクは内心非常に怒っています。誰よりもプーチンに対して、そして欧米の指導者たちに対して、日本の指導者に対して、怒っています。気候変動の問題とか、世界が抱える問題は山の様に沢山あります。戦争なんかやってる場合じゃない。本当に大事なことをやらないといけない。そう思うから、腹が立って仕方が無いのです。多くの方がこの怒りを共有して、戦争を止めさせるように働きかける必要があります。ボクはいまだにミンスク合意が解決の出発点になると考えています。今日の講演会が少しでも皆さんの参考になれば幸いです。



長良川鶺鴒

Photo by Kuwabara

《参加者・協力者へのお礼 主宰・吉田千秋》

皆様のご協力で、当日はZOOMによる参加も含めて約70名の参加者で、討論会用に設営した会場は満杯になりました。

さらに、終了後に当日の講演をYoutube(「gifu9jou」)で視聴できるようにしたところ、90名の視聴(7月末)がありました。

当日のアンケートのほか、このYoutube視聴も含め、多くの感想・質問・意見が寄せられました。ありが

とうございました。

これがウクライナ戦争を停止させ、もっとも理不尽な残酷なすべての戦争がなくなるきっかけになるよう、心から期待しております。

あわせて今後も「哲学カフェdeぎふ」へご協力を願います。

<15周年記念講演・討論会のアンケート、感想など> *スペースの一部縮小し、すべて無記名にしました。

○講演と参加者の議論有益でした。顔の見える場での議論は大変だと思いました。メディアの情報が一方的に狭められている今の日本には、こういう場がもっともっと必要だと感じました。

○このような戦争の終結には、国民の厭戦気分が高まる必要があると思われます。だが、「ソ連時代を懐かしむ」や「強い国家の希求」といった国民感情が基盤にあることを知って興味深かったです。アメリカにおいても「強い国家」が背景にあることと共通して。

○お話の根底には、戦争をしてはならない、してる場合ではない、直ちに止めて平和へ向けて構築しなければならないという想いがあると受け止めました。この想いをさらに広め共有できますように。

○現在のマスコミの報道は戦況がどうだとかばかり流しています。BS6やBS8のテレビは毎晩のように報道しております。過去の歴史や両国の因果関係などをきちんと説明してくれる報道は、戦争が始まって150日も経過しているのに、ほとんど忘れられているかと思うほど、表層ばかりの報道です。

私は戦況を聞きたいわけではないし、どうしたら根源の問題を解決するかということです。この点で、竹森正孝先生の15周年記念講演を深い感銘を受けて聞きました。(略)

○記念講演会の成功おめでとうございます。もう15年になるのですね。せめてとレジユメをと読みましたが、私には難しくて。そんな難しいことよりずっと分かり易い、戦争をしないということを、何故皆さん真剣に考えてくれないのかとても不思議です。昔どこ



かで読んだ、「戦争の無い生活なんて退屈でやり切れない」というのは、ある種の人達にとっては本当かも知れないと思うことがあります。でも私には地球は人間にとって簡単に退屈するような底の浅いものではないはずと思われるのですが。

○竹森さんのお話の中で印象に残ったのは、「ダブル・スタンダード」という言葉でした。なぜなら、これまでに米国が起こした幾多の戦争においては、コンビニにまで募金箱が置かれることはなかったからです。

もうひとつ、竹村さんが「前提は、ロシアはけしからん、である」と述べられたことも気になりました。私は2022年2月24日に起こったことだけを見るのではなく、そこに至る経過を知ることが、とても大切だと思います。講演のレジユメの中でも両国をめぐる歴史的経過が書かれていましたが、米国がそれまでにどんなことを行ってきたかにもっと焦点をあてること必要だと考えます。(略)

cf. <http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1803.html>

○竹森先生の講演はこの戦争の歴史的背景を説き起こしており、様々な観点からの示唆に富んだ内容であった。問題があまりにも広範な領域に及び、完全には理解することはできなかつたのであるが、講演要旨を後で繰り返し読むことができてよかった。この戦争は、今や、2国間というよりは、世界中を巻き込んでしまった状況を考えると、日本の対応の仕方も短絡的であってはならない。大事なことはアメリカ主導の「グローバル戦略下」に置かれないようにすることであり、日本独自の平和主義国家としての活動を堅持することではないかと考える。(略)

○(Youtubeを視聴して) 竹森先生の講演で一番気になったことは、米国の動きの話がほとんど出てこなかつたことでした。ウクライナ戦争の停戦の可能性の鍵を握っているのは米国だと思います。米国がウクライナ戦争の続行を望む限り、この戦争は終わらないのではないかと思うからです。

米国はNATOを東方に拡大してロシア包囲網を作り、ウクライナ戦争でロシアの弱体化崩壊を狙う世界戦略をもっていると言われていています。このようなこ

とから、ウクライナ戦争は米国の動きを抜きにして、語ることはできないと思います。また、講演の中で報道についての問題点の指摘もなかつたことも気になりました。(略)

cf. 安斎育郎「ウクライナ戦争を見る視点」(ISF独立言論フォーラム (isfweb.org))

○先日はありがとうございました。映像の配信も有難うございました。聞き逃したりよく分からなかつたりしたので繰り返し見ることができました。

よく分からなかつたことと言えばタタールのくびきのモンゴル人のことでした。モンゴル帝国のことも知らないし宗教のことも知らないし分からないのですね。最後に、ロシアも大統領令を最初の草案である「憲法と法律にもとづいて…」に直して、国民や周辺諸国の信頼を得ることでお互いの国の安全保障が構築できたら良いのにと思いました。(略)



<この一本> 監督:N・キアナン、D・マッグラ『僕たちの哲学教室』

アイルランドほか4カ国合作、日本公開2023年

<分断を越える試み>

カトリックとプロテスタントの長年にわたる深刻な対立と凄惨な内戦で、アイルランドの人々は深く敵対させられ、傷ついてきた。その背後にはそれぞれを支援する国々のイデオロギーがあり、北アイルランドの中心地ベルファストは今も「平和の壁」と呼ばれる分離壁に隔てられている。

かつて僕もこの街を訪れた時、小さな通りの縁石まで「分離のペンキ」で区分され、一触即発ともいえるピリピリした重苦しい空気に満ちていたことを鮮明に覚えている。現在は一応の和平状態にあるものの、重い歴史と暴力的環境の中で傷ついてきた子どもたちの心のカサバタは僅かな出来事ですぐに剥がれてしまう。

そうした中で、ホーリークロス男子小学校では、過

酷な状況乗り越えてきたケヴィン・マカリービー校長自らが教える「哲学」が、全校生の必須科目になっている。カメラは友達や家族の間での意見の違いや、正解がない小さな争いを追いつける。ケヴィン先生は忍耐強く耳を傾け、それぞれ違う意見を書き留め、「どんな意見にも価値がある」と対話を促し、暴力の連鎖を断ち切ろうとする。



(ベルファスト分離壁:撮影 津田)



『僕たちの哲学教室』は、この哲学の授業を2年間にわたって記録したドキュメンタリー映画。アイルランドの作家ナーサ・ニ・キアナンと映画編集者デクラン・マッグラが共同で監督したもので、国内外の映画祭で高く評

価されている。“分断の時代”と言われる今、すべての人たちに観てほしい。

(津田正夫)



岐阜城と月

Photo by Kuwabara

<この一冊> 堤 未果 著『堤未果のショック・ドクトリン』 幻冬舎新書、2023年5月刊

先月のこの欄で、BS映像「100分de名著：ショック・ドクトリン」が取り上げられ、その際合わせて紹介された堤さんの近著が本書である。

続けて紹介するのは、なりふり構わず強行している戦争準備の大軍拡と共に、もっとも批判的になっているマイナンバー制度、無責任なコロナ対策の根本を見事にとらえて筆法鋭く、分かりやすく説いているからである。

その根本とは、大災害やテロ、感染症、戦争などの不安を利用し、巨大資本が政治権力の中核に入り、利益をむさぼり取る新自由主義の手法＝ショック療法である。

とくにいま焦眉の課題になっているマイナンバーカード問題については、大変事例を具体的に示し、大変分かりやすい。このはじまりは2002年の「住民基本台帳ネットワークシステム＝住基ネット」。だが14年間で2000億円の税金投下。でも、普及率たったの5.5%。そこで、あらたに住民票をもつすべての国民に12桁の番号が振り当てられ、2016年にマイナンバー制度を実施し、登録してカードを作りましょうと呼びかけた。ところが不安感が広がり普及が進まない。そこで、登録したら5000円、健康保険、公金受け取り銀行口座も登録したら2万円。この

キャンペーンで1兆8000億円・国立大学の授業料すべて無料にできる額。さらに、登録しないと保険証もつかえなくするぞ、と脅迫。国民はあらためてこれはおかしいぞと目覚め始めた。

こんなことまでして強行するのはなぜか。詳しくは本書に書かれているからぜひ読んでほしい。また、諸外国ではデジタル化が進んでマイナンバー制度は行き渡っているというのもデマに等しい。

ともかく、国家・資本は国民を絡み取って、どこまでも強欲に利権を求め、人権をないがしろにしている。そうさせないように、私たちはどうしたらよいか。本書の副題は、「政府のやりたい放題から身を守る方法」である。一人ひとり思考を停止しないで、おかしいなという感覚を大切にしていきたいものである。

いまぜひ本書を手にとって欲しいと思っている。

(Sensyu)



哲学カフェ 第29期(2023年前半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00

ふれあいスペース⇒コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

<p>第181回例会 7月15日(土) 14:00~16:30</p>	<p>設立15周年記念行事:講演と討論 ◆会場 長良川スポーツプラザ テーマ「ロシアとウクライナ戦争・・・日本はどう向き合えばいいのか？」 講演:竹森正孝さん(岐阜大学名誉教授、ロシア・東欧比較憲法研究) リアル参加+オンライン配信(事前申し込み必要)も行います。</p>
<p>第182回 8月10日(木) 19:00~21:00</p>	<p>「沖縄を再び戦場にさせないために・・・緊迫した現地を訪ねた人に話を聞いて」 *西南諸島は「台湾海峡有事」を煽る政府によって、ミサイル基地化を強行推進されています。 *だが島民の反発も急増。そこに参加された嵯峨崎聖子さんの話を聞いて意見交換します。</p>
<p>第183回 9月14日(木) 19:00~21:00</p>	<p>「世界125位、なぜ男女平等は進まないのか？」 *今年のWEFの発表では日本はまたも下がって、146カ国中の125位。東アジアでは最下位。 *特に政治と経済の分野での遅れがひどい。何が問題で、どうすれば良くなるのか考えてみたい。</p>

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願いします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



★梅雨シーズンは鬱陶しいものであるが、雨に打たれている色とりどりの紫陽花壇を眺めるとなかなか風情がある。とくに、青一色や白一色ではなく、赤紫やピンクのガクアジサイまで、多種類の植え込みがあって、「多様性」の調和と美を感じるのではなかろうか。

★そこで現実社会の「多様性」の問題を考えると、話は深刻である。それは、多数派「マジョリティ」と少数派「マイノリティ」との相克である。多数派の人々が少数派の人々に寄り添うことができない社会の問題である。

★具体的にはまず、LGBTQ (性的少数者)に対する理解の問題が挙げられる。

先日、国会で通過した、「差別理解増進法」に対して、法政大前総長の田中優子氏は、これは「差別増進法」だと言ったほうがよい悪法だと断じている。

★そのほか、外国人、女性、障がい者、高齢者など枚挙に暇がない。さらに、沖縄の人々は本土の人口と比べれば、やはり「マイノリティ」に属する。沖縄の悲劇は、本土の悲劇でもあると思うが、一向に「日米地位協定」は改善されていない。

★一方、絶滅危惧種の増加は、地球の危機と感ずるのは、私一人だけではないと感じている。畢竟、「多様性」を尊重する共生社会こそ、差別のない社会であり、すべての日本人が目指すべき方向ではなかろうか。

(島田幹夫)